

名 称	令和6年度 第1回ほどがや市民活動センター評議会 議事録		
日 時	令和6年5月30日(木) 14:00~16:00		
場 所	ほどがや市民活動センター(アワーズ) ミーティングスペース		
出席者	評議会委員	小倉 敬子 委員 (公財)かわさき市民活動センター理事長 近藤 博昭 委員 横浜商工会議所西部支部 支部委員 竹迫 和代 委員 参画はぐくみ工房代表兼ファシリテーター 藤枝 香織 委員 (一社)ソーシャルコーディネートかながわ理事・事務局長 堀 功生 委員 保土ヶ谷区連合町内会長連絡会会長	
	保土ヶ谷区役所	地域振興課 地域振興課長 川瀬 倫子 " 生涯学習支援係長 李 悠 " 生涯学習支援係 鈴木 佑弥 " 生涯学習支援係 和田 喜代美	
	協働運営会議	代表 清水 蓬山	
	管理運営業務受託者 特定非営利活動法人 横浜市民アクト	理事長	福島 伸枝
	ほどがや市民活動センター センター長	北川 有紀	
	" 職員	近岡 友仁	
	" 職員	宮原 美佐	
	" 職員	小林 康夫	
	" 職員	姉川 圭一	

議題	1 令和6年度 ほどがや市民活動センター事業について 2 意見交換
資料	1 令和6年度 ほどがや市民活動センター 評議会委員・関係者名簿 2 令和6年度 アワーズ事業構想 ほどがや市民活動センター 令和6年度事業一覧 3 ほどがや市民活動センター評議会会則 4 ほどがや市民活動センター協働運営会議会則・組織図 5 「街の学習応援隊」事業概要 (当日配布資料) アワーズ3か年計画(R6更新)、ほどがや市民活動センター情報紙 OURS 「街の学習応援隊」事業内容について(案)

- *川瀬地域振興課長の挨拶に続き、評議会会則第8条に基づき、委員6名のうち5名の出席を確認し、本評議会の成立が確認された。
- *令和6年度第1回評議会議事録を、ほどがや市民活動センターホームページに掲載する旨を出席委員全員の了承を得た。

議題1：令和6年度 ほどがや市民活動センター事業について

■ 事業（イベント）について

センター長から事業の説明を行った。

<質問>アワーズ3か年計画について。課題のループと希望のループ、この資料のベースになっている情報は何か？

<回答>センター長が研修参加、各種資料、日常現場の経験等を総合して作成した。

<質問>新規事業の若者活動促進事業の中で、2月ごろに予定している多世代交流イベントは、毎年同時期に実施する「ほどがや会議」と何かリンクするのか？

<回答>別として考えている。

<質問>地域には既に若者が関わる組織が存在している。子ども会、ボーイスカウト、ガールスカウト、町会の青年部、PTA、消防団等々。学生だけでなくそれらの若者を意識して取り込んで連携する発想はあるか？仕掛けづくりをどのように考えているか。

<回答>主体的に動く学生と若手社会人の世代をターゲットとして考えている。

<質問>新たな場づくり事業ではどのようなターゲットの声を拾いたいと考えているのか？

<回答>この事業では特定のターゲットは設けずにアワーズ職員から各地へ出向いて、あらゆる人に関心をもってもらいたい。始めは遊びや井戸端会議でもよく、対話の中から声を拾いたい。

<質問>当事者の若い人たちは、アワーズに対してどんなコーディネートを期待していると感じているか。

<回答>学生は、地域に興味があってもどこに行き誰に合えばいいのかわからない。地域の人には学生がどこにいるのかわからない、そこがわかれば互に関心はあると感じる。学生にとっては、何度もイベントに声をかけてくれたことが嬉しい、何か役に立ちたい、人と交流したい、成長したい等を求めている。就職先を横浜で見つける学生も増えていて、結果地域に関心を持つことにつながっていると感じる。

<質問>学生のあいだ4年間は楽しいからやってくれるが終わったら帰ってこない。今後もずっと保土ヶ谷の為にやってくれる人かどうかというのが一番大事。根を張

って活動しているお店の人、消防団、子ども会等、そういう人たちの情報をアワーズが集めてネットワークする、それが若者ネットワークにならないか？

〈回答〉学生は地元に戻ったり東京に出たりして保土ヶ谷には戻ってこないかもしれない。活動に参加した学生が地域を身近に感じ、大人になってから地域に参加することもある。若いうちから地域との関係のつくり方を体験的に覚えるということが大事で、卒業していく学生を育てるのも大いにやるべきと思う。

〈質問〉市民活動団体が対象となる支援事業がない。少額助成の分配をアワーズに委託する等はできないか？

〈区回答〉現在計画はない。保土ヶ谷区 100 周年実行委員会に登録する活動団体に向けて、新規補助金を準備している。

(委員意見)

・場づくり事業ではどういう成果が欲しいと思っているのか、イメージ化・文字化するとよい。声を拾う事を目標にしているのなら、誰のどんな声を拾うのか、それをもとに何をしていきたいのか、思い付きではなく、練ったものを。なぜ、これをアワーズがやるのか理由づけやプログラムの目指すところが見えると、アワーズスタッフが外に出ていく理由が見えてくる。

・消防団、スポーツ推進委員、青少年指導員、PTA といった組織は以前から個別団体ごとにディスカッションしている。自分たちのテリトリーから外の団体を眺めるとか、協働で地域に何かができないかとかの動きが出てきていることを期待したい。主体的に活動している団体のネットワークをアワーズが広げてあげるべきだと思う。

・高齢者対象のスマホ勉強会は、今年度終了が惜しい。お年寄りが集まる場として、勉強しながら皆で話し合うのを目的にして良いと思う。修了後の受け皿になる場を期待したい。良かったら続けてね、ではなくグループとして立ち上げる仕掛けづくりが必要。自立化を支援することがアワーズの仕事だと思う。

・市の補助金が減るなら国の補助金も検討するとよい。

■ 事業（通常業務）の「街の学習応援隊」について

アワーズから区へ変更提案した内容を当日資料で配布し意見を求めた。概要は以下の通り。事業目標を変更し活動者育成を重視し、登録期間を2年限りとする。事業内容を登録者どうしの学び合いを主にして、PR 講座や地域団体とのマッチングを行うこと。現状の登録条件に加え、区内在住の個人、生業でないこと、商標登録された内容でないことを新たに付加すること。

(区) この提案はあくまでもアワーズ独自の内容。これから区とアワーズで話し合いをして内容を検討する。

〈質問〉登録を個人だけにして団体はしないというのはなぜか？

〈回答〉アワーズには団体登録制度があり、地域に団体紹介することができるため。

(委員意見)

- ・団体情報をアワーズの職員が知っていても、一般の人に分かるように広報をしないのでは団体資源の広報につながらない。可視化しておくことが大切。
- ・当事業ではアワーズは紹介するだけで、活動を決めるのは当人同士。直接連絡を取り合って決めてもらえればよい。コーディネーターが活動費まで責任を持つ必要はないと思う。
- ・登録期間を2年で終了するのではなく、やる気があることを確認すればよい。
- ・活動経験がある人は事業の仕組みを理解してもらえばよく、初めて登録する人は、地域団体に呼ばれた時の対応を学べばよい。経験者も初心者も皆同じというのは理解できない。
- ・自分たちの持っている専門性やスキルをどう活かせばよいのか、市民団体から相談を受けることがある。まずはやってみることを勧めるのだが、その「場」がない。アワーズがそこをコーディネートするならば、街の学習応援隊登録者だけでなく登録団体にもそこに魅力をもつ人はいると思う。
- ・自治会町内会にはお祭りをやっているところ、餅つきをやっているところ、成人式をやっているところ等様々ある。連合町内会とも協力して情報提供していけたらと思う。
- ・連合町内会を通した情報提供はやってほしい。

■ 事業（通常業務）の「協働運営会議」について

(協働運営会議代表)

コロナ禍をきっかけに団体活動の縮小や解散などがあり、協働運営会議メンバーが30団体ほどから現在19へと減少した。以前は交流会を3~4回実施していたものの昨年ようやく2回と復活させた。今年初のイベントは6月1日に防災講座を予定している。今年は、役員会議を気軽に参加できておしゃべりしながらアイデアを出し合う形の会議に変えたいと考えて、1年かけて会則見直しを検討したい。

(アワーズ)

参加メンバーの協働に対する捉え方が異なる。事業や交流会を増やす中で一緒の目的をどうやってもつかという会話が生まれればと思う。

(委員意見)

- ・参加団体が少なくなった中で、検討を続けているのは素晴らしい。課題にある協働の体験機会不足、ビジョンを語り合う場面の不足という指摘が大事。今年度どのように改善するかが重要になる。
- ・参加者はきっとアワーズをよりよくしたい気持ちを持っているのではないかとアワーズ事業に対して、アイデアをもらう機会としたり、交流をしつつアワーズへの助言をもらう形が良いと思う。
- ・協働運営会議の存在自体をアピールするような公開の事業、交流会を企画して、参加メンバーを募ると良い。
- ・会則を変えるのか、会則外で交流会等をやるのか考えてもいいと思う。

■ 全体を通した委員からの意見

・アワーズを盛り立てていこうという人に囲まれて運営していることが伝わってきた。新しい事業に取り組もうとしていて、これからやりながら考えることが多いと思うが是非チャレンジしてほしい。区版センター事業として新しい取り組みが形になることを期待している。

・利用者への声掛けが非常に早くなっていると印刷利用時に感じた。いいタイミングで来てくれる。

・以前実施していた「まなぶん祭り」を復活してもいいのではないかと思った。参加団体も来場者もすごく喜んでいる場だった記憶がある。

・若者というキーワードが全面に出ているのがアワーズの独自色と感じた。アワーズが考える偶然や意図していない出会いを発展させ事業化することと、委員から指摘があった意図して事業を組むこととの両者のバランス。難しいけれど考慮するとよい。